



公益財団法人

鈴木謙三記念医科学応用研究財団

第68回 学術講演会

日時

平成27年11月26日(木)
午後6時～8時

場所

名古屋マリオットアソシアホテル
16階「タワーズボールルーム」

知りたい! 身体の中の出来ごと —聴診器誕生から200年—

代表世話人

(公財)結核予防会理事長
日本医科大学名誉教授

工藤 翔二先生

講演 I . 座長

(公財)結核予防会理事長
日本医科大学名誉教授

工藤 翔二先生

講演. 「聴診法の発見者
ルネ・ラエンネックとその生涯」

順天堂大学医学部特任教授・名誉教授

酒井 シツ 先生

聴診器の発見者
ルネ・ラエンネック



世界初の聴診器

講演 II . 座長

名古屋大学大学院医学系研究科
病態内科学講座 呼吸器内科学分野教授

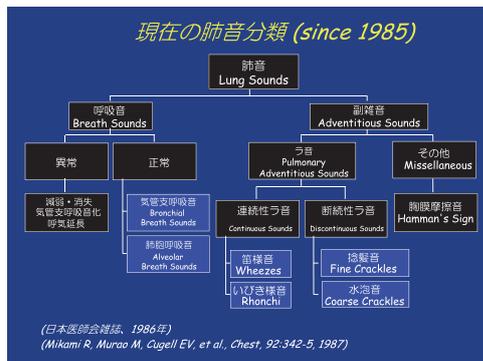
長谷川 好規 先生

講演. 「肺聴診の科学」

福島県立医科大学医学部医学科
呼吸器内科学講座教授

棟方 充 先生

現在の肺音分類 (since 1985)



後援 / 愛知県医師会

この講演会は、愛知県医師会生涯教育認定講座2単位が取得できます。

講演I :

「聴診法の発見者
ルネ・ラエンネックとその生涯」

順天堂大学医学部特任教授・名誉教授

酒 井 シ ヅ 先 生



講演II :

「肺聴診の科学」

福島県立医科大学医学部医学科
呼吸器内科学講座教授

棟 方 充 先 生



プロフィール

1960年 三重県立大学医学部卒業
1967年 東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
1961年 三重県立大学医学部解剖学教室助手
1967年 順天堂大学医学部医史学研究室助手
1973年 順天堂大学医学部医史学研究室講師
1984年 順天堂大学医学部医史学研究室助教授
1984年 順天堂看護専門学校主事
1989年 The Welcome Institute for the History of
Medicine Visiting fellow
1991年 順天堂大学医学部医史学研究室教授
2001年 順天堂大学医学部医史学研究室客員教授
順天堂医療短期大学客員教授
2004年 順天堂大学医療看護学部客員教授
帝京平成大学ヒューマンケア学部教授
2008年 順天堂大学名誉教授 現在に至る
順天堂大学特任教授 現在に至る
2014年 「日本医学教育歴史館」(順天堂大学)館長
現在に至る

学会活動:

一般社団法人日本医史学会 理事長(平成18年~平成25年)
日本医科器械資料保存会 理事長
財団法人日中医学協会 評議員
大韓医史学会 名誉会員
Asian Society for the History of Medicine president

著書には『日本の医療史』、『解体新書』(現代語訳)、
『病が語る日本史』など多数。

1977年 北海道大学医学部卒業
1982年 北海道大学大学院医学研究科修了(医学博士)
1985年 Johns Hopkins大学研究員
1987年 Johns Hopkins大学助手(環境健康科学講座)
1988年 北海道大学医学部助手(内科学第一講座)
1992年 北海道大学医学部講師(内科学第一講座)
1999年 福島県立医科大学医学部教授(呼吸器内科学講座)
2007~2010年 福島県立医科大学附属病院副院長(兼)
2010~2012年 福島県立医科大学理事・会津医療センター準備室長(兼)
2012年 福島県立医科大学附属病院院長
2014年 福島県立医科大学理事長特別補佐・法人経営室員(兼)・
医学部教授(呼吸器内科学講座)
現在に至る

学会活動:

日本呼吸器学会: 理事(2010-14)、東北支部長(2006-9、2014-)、
Respiratory Investigation (Associate Editor) (2012-)
日本アレルギー学会: 評議員、
Allergology International編集委員(2005-6)、
日本内科学会: 評議員、Internal Medicine 編集委員(2001-5)
アジア太平洋呼吸器学会(APSR): 理事(2007-)
米国胸部疾患学会(ATS): RSFプログラム委員2004-2011
その他

「聴診法の発見者ルネ・ラエンネックとその生涯」

順天堂大学医学部特任教授・名誉教授

酒 井 シ ヅ

19世紀初頭、医学は近代医学に向かって大きく発展したが、それに寄与したのがルネ・ラエンネックの聴診器の発見であった。このときまで、生存中に病気の原因をつきとめることができなかった。生前に、症状の診断から病気の原因を知る方法を見つけたのが、ラエンネックの聴診器であった。

ラエンネックは1781年にブルターニュの地方都市カルペーに生まれた。父は弁護士であったが、6歳で母親を失い、医師の叔父にひきとられて14歳から医学を学びはじめた。まもなく1799年から1800年にかけてフランス革命の軍医として参戦。戦後、シャリテー病院に入り、当代一の名医コルビザールに師事して、本格的に医学を学んだ。

この時代より少し前、18世紀半ば、イタリアでは病理解剖学が盛んに行われていた。それまで病気は全身の体液の病変とみていたが、解剖学者モルガーニが、それぞれの病気には、必ず決まった臓器に変化がみられることを観察していた。

病気には座がある、しかし、それは死後の解剖で知る。それを生前

に知る方法がないかと病理学者で、熱心に結核の研究をしていたラエンネックは考えた。生きているうちに病巣を確認したいと、耳をじかに胸に当てて呼吸音などを聴くのに腐心していた。

1816年のある日、通勤の途上、子供達が公園で電話遊びをしているのを見て、はっと気づいた。病院に着くと、急いで紙を筒状にまいて、太った患者の胸に当てた。期待以上に音がよく聞こえた。

ラエンネックは長さ30センチ、直径3センチの木製の円筒に直径5ミリの筒状の穴を開けて、聴診に使い、それをステレオスコープと命名した。聴診器の発明である。

1819年、発明から3年後、ラエンネックは新たに改善した聴診器を使って得た臨床所見と病理所見とをまとめて、『間接聴診法について—肺臓、心臓の病気診断法』2巻を著した。その本は、聴診器とともにまたたくまに世界中に広がり、医学の長足の進歩をみちびいたのであった。

ところで、ラエンネック自身、若い頃から胸部疾患に悩まされ、たびたびパリを離れていたが、1826年、郷里の療養先で亡くなった。享年45。

「肺聴診の科学」

福島県立医科大学医学部医学科
呼吸器内科学講座教授

棟 方 充

聴診器は1816年、フランスの医師ラエンネックにより発明され、今年で200年目を迎えた。肺聴診は今でも臨床現場で日々用いられている基本手技であり、聴診器は医療者のシンボルとして生き続けている。肺から出る音の持っている情報を臨床診断に応用する試みは、フランスにおいて症候学(semiology)として確立した。1960年台から呼吸生理学が急速に進歩し、1980年台からはコンピュータが普及し、音を科学的に分析・評価することが可能となった。これらを背景として、1976年には国際肺音学会、本邦では1980年から肺音（呼吸音）研究会が設立され、世界的に勢力的な研究が進み、科学としての聴診学が確立するに至った。本邦では、1985年の第10回国際肺音学会（三上理一郎会長）に際し、「新しい肺音分類」が提唱され、以後、この分類がスタンダードとなっている。

肺から出る音は大きく呼吸音(breath sound)と副雑音(adventitious sound)の二種類に分類される。呼吸音は呼吸に伴って生理的に発生する音であり、気道内で発生する乱流が主な成因と考えられている。

呼吸音は気管支呼吸音と肺胞呼吸音に分類される。その異常は、呼吸音の減弱・消失、呼気延長、気管支呼吸音化などであり、換気障害、気道狭窄、炎症性浸出物貯留などと関係する。

副雑音は種々の呼吸器疾患の病態に伴い新たに生じてくる異常音である。肺から出る副雑音をラ音と呼び、連続性ラ音（笛音:wheezes、いびき音rhonchi）、断続性ラ音（捻髪音:fine crackles、水泡音:coarse crackles）に分類される。連続性ラ音は狭窄した気道の振動や気道内粘液の振動により生じると考えられている。一方、捻髪音は呼気時に閉塞した末梢気道が吸気時に急激に解放する音、水泡音は気道内に生じた分泌物による膜が吸気時・呼気時に破裂する音と考えられている。その他の音としては、胸膜から発生する胸膜摩擦音、縦隔気腫の際に聴かれるHamman's signなどがある。

肺聴診に際しては、肺音がどのようなメカニズムで発生し、どんな生理・病態生理と関連しているかを十分理解し、臨床診断に役立てて行くことが重要である。また最近では、音を、換気モニター・咳モニター・気道過敏性指標・OSAS診断などに用いるなどの新しい試みもなされている。

講演では、実際の音を聴たり、ビデオを見たりしながら、上記の内容を出来るだけ分かりやすくお話ししたい。